

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。
なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 空が揺れる日

¥630

昭和54年9月25日

初版1刷発行

昭和54年10月15日

2刷発行

著者

佐野 洋
東京都大田区中央6-11-8

発行者

小保方 宇三郎

印刷者

鈴木 貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所

東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347

株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Yo Sano 1979

[(分)0-2-93(製)02379(出)2271](0)

Printed in Japan

長編推理小説

そら ゆ ひ
空が揺れる日

さ の よう
佐野 洋



カッパ・ノベルス

『空が揺れる日』 目次

序章	予言者の訪問	5	中間の章6	予言者の周辺	146
第一章	白昼夢	11	第七章	唐立温泉	151
中間の章1	予言者の正体	30	中間の章7	予言者の愛人	168
第二章	集団妄想	35	第八章	学者の裏面	172
中間の章2	予言者の疑問	53	中間の章8	予言者の関心	191
第三章	蔭の女	58	第九章	後継者	196
中間の章3	予言者の推理	77	中間の章9	予言者の部屋	213
第四章	殺された女	82	第十章	女心理学者	217
中間の章4	予言者の足跡	101	中間の章10	予言者の質問	234
第五章	潜在意識下広告	106	第十一章	女装の人	239
中間の章5	予言者の死体	124	終章	予言者の武器	254
第六章	秘密調査	128			

イラストレーション

安岡

旦

序章 予言者の訪問

一九七八年四月五日（水曜日）

かみやまだ

北海道警札幌中署の署長上山田警視正は、一人の客を送り出すと、大きな溜息をついて椅子の背にもたれかかった。（作者注、札幌市に中署という警察署はありません。小説の性質上、架空の署を作りました）

時計を見る。十一時七分であつた。一時間近く、その客と応対していたことになる。

まったくの時間つぶしであつた。本来なら門前払いを食わせて当然の客である。だが、名刺の肩書と、『重大な情報がある』という言葉に欺だまされて会ってしまったのだつた。

男の名前は、相川洗介。そして、その大型の名刺には、富山県椎川市市議会議員と、名前の右肩に刷りこまれていた。（作者注、椎川市も同様です。以下、原則としてこれになります）それにしても……と、上山田は考えた。お粗末な市議会議員がいるものだ。市議会の質問などにも、彼は『神のお告げ』なるものを持ち出すのだろうか。

そのとき、ドアがノックされた。しかし、そのノックは形式的なもので、上山田の返事を待たずに、ドアは開けられた。

姿を現わしたのは、中央日報の沖中記者おきなであつた。

「やあ、いらっしやい」

上山田は、愛想よく沖中を迎えた。彼は、何となくこの若い記者に好感を持っていた。去年、大学を卒業し、中央日報に入社すると同時に、北海道支社に配属されたというから年齢は二十三、四であろう。現在、司法修習中の上山田の長男と、ほぼ同年齢であり、からだつきなども、長男と似た感じがあった。

「何だか、面白いお客さんが来ていたそうですね」

沖中は、さつきまで、相川が腰かけていた肘掛椅子ひじかけに腰をおろしながら言った。

「面白いということもないが……」

「でも、次長が言っていましたよ。署長室に予言者が来ているとか……。ちよつと前に出て行った人がそうなんですか？」

「うん……。この人だけだね」

上山田は、相川の名刺を、沖中に渡した。

「市議会議員？　へえ……。で、予言というのは？」

「空が揺れるというんだよ。だから、きょうは、飛行機を全部止めたほうがいい。大惨事が起きる可能性があるとか……」

「空が揺れる？　空震のことですか？」

沖中は、名刺を椅子の肘掛けに置いて、身を乗り出すようにした。

「空震？　それ、何のこと？」

「この間、どこの新聞だかに出ていたんですよ。アメリカの東部沿岸地帯で、謎の大音響が続発しているとか。……何でも、突然、大きな音とともに、空が震動するんだそうで、家屋が揺れ、ガラスが割れたところもある……。ダイナマイト百トン分相当のもあったな

んて書いてありましたよ」

「原因はわかっていないの？」

上山田は、眉をひそめた。かすかな不安が胸をかすめた。

「ええと……。うろ覚えですが、いろいろな説があるらしいです。米軍の極秘実験説、地殻の裂け目から、メタンガスが噴き出て空中で爆発したという説。とにかく、まだ、はっきりしていないんでしょうね。連邦政府が調査に乗り出したとも書いてあったけれど……」

「ふうん、そんなことがあるのかねえ。しかし、その相川氏の話は、その空震ともちよつと違うらしい。何しろ、神のお告げだというのだから……」

「神のお告げ？　じゃあ、これですか？」

沖中は、右手の人さし指で、耳の上のあたりに輪を描いた。

「いや、一応、富山県の椎川署にも問い合わせてみたんだが、相川氏の精神状態がおかしいという噂は聞いていないそうだ」

「わざわざ、問い合わせたんですか？」

「それはそうだよ。何しろ、飛行機事故があるかもしれない、という話だろう？　過激派の情報をつかみ、そんな形で教えに来たのかとも思ったし……。椎川署の話では、彼と過激派とは結びつかないそうだけれど……」

「しかし、神のお告げというのは……」

「相川氏は、市の体育厚生委員をしていて、札幌には、ジャンプ台の視察に来たのだそう。そう言っただけが悪いが、年度末なので、慰労出張のようなものなんだろう。きのうは、札幌ルビー・ホテルに泊まった。そして、けさの九時ごろ目を覚ましたところ、そのとた

んに、どこからともなく、『空が揺れる』という声が、はっきりと聞こえた。しかも、それは、三度か四度繰り返された。まあ、簡単に言えば、そういう話だよ」

「夢でも見たのかな？」

「そう考えるのが普通だろうな。しかし、相川氏には、前にもそういう経験があるんだそう。数年前、やはりどこかに出張中、旅館でお母さんに呼ばれたように思っただけで飛び起きたことがある。そうしたら、翌朝、そのお母さんが亡くなったという電話が届いた。そういう例があるから、今度の場合も、あれは本当のことだというわけだ」

「本人は、本当に信じているんですかね？」

「信じているんだろうな。非常にまじめな顔をしていたから……。道庁に行こうか、航空会社に行こうかと、いろいろ考えたが、人命に関することだから、警察がいいだろうと思っただけ、ここにやって来たんだそう」

「で、どうしたんです？」

「しようがないでしょうよ」

と、上山田は笑った。「彼は、すぐ道警本部長に報告して、飛行機を止めろというのだが、そんなことを連絡すれば、札幌中署長はもうろくしたと言われるだろうしな。警察には、飛行機を止める権限はないから、管区気象台や航空管理事務所、航空会社などに、ご高説を伝えるから、と言って、引きとってもらったよ」

「すぐ帰りましたか？」

沖中は、興味深そうに聞いた。

「いやいや……」

上山田は首を振った。「叱りつけられたよ。権限とか管轄などと言っている場合じゃないだろうってね。何でも椎川市には、遊軍課という課があって、市民の訴えを何でもその課が取り上げ、土木課とか商工課の尻をつつくのだそう。これは、お役所の縄張りを取り払うものだ、市民の評判はいい。それと同じように、人命に関することは、すべて警察が勇気を持ってやればいい……。何百人の生命が危険なのだから、くびを覚悟で、飛行機を止めてくれ……。市会議員だけあって雄弁でね。とにかく閉口したよ」

「それは困ったでしょうね」

沖中は、笑いながら相槌を打ったが、途中から、急に表情を引きしめて言った。「しかし、仮に、きょう、飛行機事故があったらどうします？」

「まさか……」

「しかし、絶対にないとは言えないでしょう？」

「それはそうだが……」

「もし、事故があったら、この相川氏は得意になるでしょうね。得意になるどころか、この事故のことは、札幌中署長に前もって注意しておいたのだが、警察は何の手も打たなかったと……」

「うん……」

上山田の胸を、また黒い影がかすめた。もし事故があれば、恐らく、相川はそう言うに違いない……。

しかし、上山田は、その黒い影を追い払うように、ことさらに朗らかな声で言った。

「まあ、そうならないことを、それこそ、神さまに祈っておくよ」

そして、実際に、飛行機事故は起きなかった。

翌、四月六日付、中央日報（北海道支社印刷）の札幌市内版には、沖中が書いたと思われる、つぎのような記事が載っていた。

※……五日の朝、札幌中署署長室に、人品いやしからぬ紳士が現われ、「飛行機事故が起きるかもしれない」という情報をもたらした。

※……上山田署長は、過激派による爆破予告の一種（？）と緊張したが、紳士は道内視察中の富山県下某市市議Aさん（マ）で、過激派とは何の関係もなく、情報は「神のお告げ」によるとのこと。

※……ご高説を拝聴してお引き取りを願ったが、同署長はことがことだけに、一日中気になり、退庁後も晩酌を控えて待機。とんだ人騒がせの「神のお告げ」だった。

第一章 白昼夢

川地保之が、自分の部屋のあるアパート『里見荘』の近くに帰って来たのは、午前十時を少し過ぎたころであつた。

この日、つまり、四月十四日、彼はへ泊まり明けであり、いつもなら、八時半には勤務から解放されるのだが、交替時刻間際に、ちよつと大きな外電がはいり、しばらくは、固い椅子に縛りつけられていたのだ。

彼はレインコートを着、折り畳み式の傘を手にとっていた。昨夜、十一時近くに、アパートを出たときに降っていた雨は、彼が勤務についている間に、すっかりやんでいた。

烈しい雨だっただけに、埃を洗われた空氣が清々しかった。

中央日報外報部記者としての彼の勤務は、

▽日曜 おそ番（正午―夕刻）

▽月曜 テレタイプ当番（十時―十七時）

▽火曜 早出（八時―十四時）

▽水曜 夜勤（十七時―二十三時）

▽木曜 泊まり（二十三時―翌日八時）

▽金曜 泊まり明け（八時退社）

▽土曜 公休

となつてゐる。

したがつて、泊まり明けで、帰宅するときに、川地は最も解放感を味わう。翌日が公休、さらにその次の日も正午に出勤すればいいのだから、五十時間以上が、連続して自分のものになるのであつた。

もつとも、土曜日の夜から日曜日にかけては、自分のための時間というより、岸三津子と二人の時間というべきかもしれない。彼女のマンションに泊まる事が多かった。

アパートの前で煙草を買い、その一本を抜き出していると、

「お早うございます。いまお帰りですか？」

と、声をかけられた。

家主であり、また管理人をも兼ねている里見夫人であ

った。

夫人と言つても、彼女には夫はいない。夫は四年前に、交通事故で死亡していた。その亡夫の遺してくれた土地に、生命保険と補償金でアパートを建て、ひとり息子を育てているのだった。

だから、本来なら、里見未亡人と呼ぶべきなのだろうが、アパートの住人たちは、かげで彼女の話をするとき、みな『里見夫人』という呼び方をしている。

彼女は、三十二歳、『大家さん』の呼び名にはふさわしくなかった。

里見夫人は、黒セーターにジーンズ、そしてセーターの上には、ちゃんちゃんこのようなものを着ていた。ふだんは、服装には、あまりこだわらないほうらしい。しかし、川地は、一度、夫人の外姿を目にして目をみはったことがある。和服に黒羽織だったが、日ごろ、ジーパンで動き回っている彼女と同一人とは思われないほど、着つけや挙措に品があり、しとやかであった。ことに、襟足の線が際立って美しかった。

「お早うございます。もうお買い物ですか？」

川地は、夫人が手にしている洗剤の箱を見ながら言っ

た。

「あ、これ？ お天気になりそうだから、洗濯を始めようと思つたら、洗剤がないことに気がついて……、あたしって、間が抜けていて、よく、そういうことがあるんです」

「ああ、洗濯にはいい日ですね」

川地は空を見た。しかし、自分も洗濯をしようとは思わなかった。夕方になれば、多分、岸三津子が、汚れ物を取りに来てくれるだろう。

川地と里見夫人とは、何となく並んで道路を横切る形になった。

「あのう……」

と、遠慮勝ちな口調で、夫人が言った。「川地さん、物知りだと思つてからお聞きするのですが、**蜷気楼**ってご存じでしょうか？」

「ええ、まあ、高速道路などで見える逃げ水というのも、蜷気楼の一つだそうですね」

里見夫人の背は、川地の肩ぐらいいしかなかった。川地は首を傾け、見下ろす形で説明した。

「あら、そうなんですの？ じゃあ、飛行機から見える

こともあるのかしら？」

「飛行機からですか？　どんな蜃気楼なんでしよう？」

川地は足をとめた。もうアパートの前に来ていた。一番手前が、管理人室で、川地は、その脇の鉄製の階段をのぼって、二階へ行くことになる。

「あのう……。ご迷惑でなければ、ちょっとお寄りになりませんか？　もう少し詳しく、蜃気楼のお話を聞きたいんです」

夫人は、眉を寄せるようにして、川地を見上げた。その頼りなげな表情が、川地には不思議に魅力的であった。「迷惑ということはありませんが……。それなら、ぼくは、部屋に行つて、百科事典を取つて来ます。ぼくのところに来ていただいてもいいんだけど、中がどうにも手がつけられないほど散らかっているから……」

「そうですか？　済みません。ちよつと気になることがあるんです」

夫人は、弁解するように言った。

百科事典の一冊を抱えて訪れた川地に、夫人はコーヒ

ーを出してくれた。わざわざ、豆からひいたものらしく、いいかおりが、部屋じゅうに漂っている。

「ええと、蜃気楼というのはですね」

川地は、百科事典を円型のテーブルの上にひろげて、読み始めた。

——蜃気楼　光の異常屈折現象の一つ。地面または海面付近の空気が著しく熱せられるか冷やされたとき、空気密度が高さとともに著しく変わる。このようなとき遠方の地物は光線の異常屈折によつて一つのものが二つに見えたり、地面が水面のように見えたりする。このような現象を総称して蜃気楼という。蜃気楼は三種に分類される。

(1)地面が異常に熱せられる場合で、ヘモンジュの現象という。砂漠地方では遠方に水面があるように見えることがある。また夏季に砂地や道路のアスファルトの上でも見られる。〈浮景〉〈浮島〉〈逃水〉というのはこのような現象である。

(2)海面が空気の温度に比べて著しく低い場合で、遠方の船が上下倒立して重なつたように見える。このような現象を〈ヴィンスの現象〉という。富山湾の蜃気楼

はこの現象に属する。

(3) 水平方向に温度差がある場合で、遠方の山や船が左右二つ並んで見えることがある。この現象をヘジュランヌの現象という。蜃気楼が現われるとき空気密度の分布が時々刻々変わるので、蜃気楼の現われ方もいろいろに変わる。——平凡社「世界大百科事典」この項の執筆者は正野重方氏——

川地は、声を出して読み上げた。しかし、それが終わったとき夫人は笑いながら言った。

「ごめんなさい。それをお聞きしても、ちんぷんかんぷんで、ちっともわからないわ。要するに、蜃気楼というのは、錯覚の一種なんでしょう？」

「いや、錯覚とは違うでしょうね。そこにはないものがあるように見えるのですが、網膜には、そのとおりに写っているわけで……。錯覚というのは、網膜に写ったのを、神経というか見る側が勝手に判断を変えてしまうのですから、ちよつと働きが違うんです」

「そうなんですか？」

夫人は、納得がいかないという表情をしている。

「蜃気楼について、何か気になることでもあるのです

か？」

「ええ……。実は、これ、久夫の作文なんです……」
夫人は、そう言つて、一枚の紙を川地に示した。

『 しんきろう

二年二組 さとみ久夫

おばあさんが、しにそうだというので、おかあさんと、ほつ海どうへいきました。でも、おばあさんは、しにませんでした。二つとまつて、おかあさんと、ひこうきでかえってきました。

ひこうきは、雲の上をとびました。そのうち、ふと気がつくと、まどの外に、ぼっかりとビルがうかんでいます。大きなえんとつもありました。

ぼくはびっくりして、おかあさんにいいましたが、おかあさんは、そんなもの見えなないといいました。

ぼくは、まえに、うおずのかいがんで、ビルやえんとつが、空にうかんでいるのを見たことがあります。おかあさんは、しんきろうだ、とおしえてくれました。

ひこうきで見たのも、きつと、しんきろうなのだと、ぼくは思いました。おわり』

「なかなか、上手じゃないですか。字もきれいだし」

と、川地は賞めた。『うおず』の『ず』が教師の赤インクによって『つ』に直されていたが、それ以外には誤りもない。

作文のうしろにつけられた教師の評には、つぎのように書かれてあった。

『たいへん、よく書けました。でも、本とうに「しんきろう」を見たのですか。きつと、見えたらいいなあ、と思つて書いたのだと思います』

「あたし、実は、きのう先生にも相談に行つたのです。だつて、本当に、蜃気楼なんて見えなかつたのですし、作文にまで、こんなことを書くなんておかしいと思つて……」

夫人は、コーヒークップを手に持ち、それに目を落とすようにして言つた。

「先生は何と言いました」

「そう氣にすることはないだろうつて。あのくらのことでもつて、頭の中で描いていることと、現実との区別がつかないようなところがあるんだそうです。かつているネコと会話をしたというような作文を書く子もいるとか……。そういう子に、嘘を書くなど言うのは、その子の

持つている才能をつぶすことになる……。だから、久夫の作文も、一つの夢と考えれば、それなりに、立派に書けている、とおっしゃつてくださったんですが……」

「ええ、ばくもそう思いますよ」

と、川地は言つた。「とにかく、書かれていることに筋が通つています」

「でも、久夫は、蜃気楼が夢ではなく、本当に見たと言つてゐるんです。それで、先生にこんな風に書かれたのが、とても不満なようなんです。先生もお母さんも、全然信じてくれないなんて……」

「ははあ……。飛行機から、蜃気楼を見たと言つてゐるのですか？」

川地は、改めて聞き返した。

「はい……。あのときだつて、ほら、お母さん、あそこになんて、まじめな顔で言つたりして……」

夫人は、声をひそめ、深刻そうに言つた。

——久夫が、作文で書いた『おばあさん』というのは、夫人の亡夫の母親だという。現在は、札幌に長男の家族と一緒に住んでいる。